

	<h1 style="text-align: center;">まごの手</h1> <p style="text-align: center;">SCE・Net 横山哲夫</p>	<p style="text-align: center;">E-100</p> <p style="text-align: center;">発行日 2017.11.15</p>
---	---	--

9回の裏、3対0、ツウアウト満塁、ツウストライク、絶体絶命。しかし、甘く入ったカーブをセンター前にはじき返す。ホームに返球するが悪送球、打者一掃、土壇場の逆転である。テレビの野球中継で、よく見る場面である。しかし、この説明のなかに、よく分らない言葉が出てくる。「土壇場」である。多くの日本人は、「土壇場の逆転」がどのような場面かを知っている。99%は負ける試合、最後の反撃で勝利をつかむ、そんなことは百も承知であろう。しかし、「土壇場」とは、一体どんな場所なのか。

第67回直木賞受賞、綱淵謙錠(つなぶちけんじょう)の歴史小説に「斬(ざん)」がある。元禄時代の江戸から廃刑になる明治十四年まで、斬首の執行を生業として、七代続いた山田浅右衛門を描いた小説である。人に苦痛を与えず、一瞬で首を切るのは並大抵のことではない。そうとうの剣術使いでなければ、できない。山田家は、それを御上(おかみ)から許され、代々続けた。明治維新の混乱のさなか、安政の大獄の志士たちも、山田家によって斬首され、吉田松陰も処刑されている。話が長くなってしまったが、「土壇場」はこの小説の舞台である。つまり、斬首を行う場所で、土を盛って築いた壇(だん)を意味する。現代の私たちは、この言葉を何気なく使っているが、うす気味悪い話である。センターがホームへ悪送球をしなれば、バッターは首を切られるところであった。

土壇場のように、切羽詰まった意味で使われる言葉に「四面楚歌」がある。秦(しん)の始皇帝が亡くなり、楚(そ)の国の項羽(こうう)と漢の劉邦(りゅうほう)が戦って劉邦が勝利し、漢帝国ができる。その時の故事で、紀元前200年以上前の中国のできごとである。いや、それを考える前に、今、使ってしまった「切羽詰まった」の切羽(せつぱ)とは、一体どのようなものなのか。考えている端から、意味の分からない言葉が沢山でてくる。

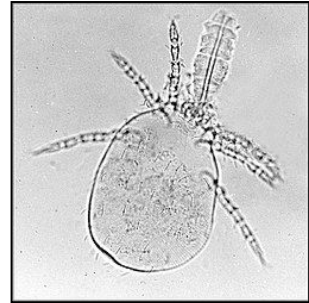
グローバル化が叫ばれるようになって、久しい日本。日本語を勉強している外国の人に、「この言葉は、どのような意味ですか。」と問われ、説明できない言葉や表現が、如何に沢山あることか。単一民族で、東の端にある島国、日本。言葉の意味が分からなくても会話が成り立ってしまう。考えてみれば不思議な国である。この年でグローバルでもないのだが、このままでは気がすまない。とりあえず、気になる言葉の意味を調べることにした。

既に紹介した「土壇場」から始めて、「四面楚歌」「切羽詰まる」「恙(つつが)無い」「ちゃつぽに追われて、とっぴんしゃん」「腐れ縁か鎖縁か」「まごの手」「身の毛がよだつ」「馬耳東風」「地団駄を踏む」「うだつがあがらない」。まだまだありそうだが、このくらいにして、途中になった「四面楚歌」からはじめることにする。

天下分け目の関ヶ原では、家康ひきいる東軍が勝った。中国の天下を二分した項羽と劉邦の戦いでは、漢の劉邦が勝利し、漢帝国が生まれる。追いつめられた項羽が陣を張った夜明け、四面を囲む漢軍が歌う、祖国、楚の歌が聞こえてくる。それを聴いた項羽は、自分の敗北をしり、絶世の美女であった愛

人の「虞美人(ぐびじん)」と脱出するが、虞美人は自分が足手まといになると思い、自ら命を絶つ。この故事の一場面を「四面楚歌」と言って、まわりは敵ばかりで、どうしようもない場面を意味している。「切羽詰まる」の「切羽」とは、刀の根元に取り付けてある金具である。ここが詰まると鞘(さや)から刀が抜けなくなって相手に切られてしまう。「土壇場」「四面楚歌」「切羽詰まる」とも、どうにもならない、困ったときに使われる言葉である。

手紙の挨拶で、無事に暮らしていることを「恙(つつが)無く、過ごしております。」と表現することがある。諸説あるようだが、「つつが」は、最近、話題になっている「ダニ目ツツガムシ科」のダニの総称で、「恙(つつが)」はもともと、病気や災難を意味している。息災であることを「ツツガ虫がいなくて、良かったね。」と言うことになる。しかし、なぜ「ダニ」がツツガ虫と呼ばれるようになったのか。それは、むかし、原因不明の病気を恙虫(つつがむし)と言う妖怪のせいだと信じられていた。原因が「ダニ」であることが分って、ツツガムシと命名されたのである。名無しの権兵衛だった「ダニ」は、めでたく、ツツガムシと言う名前をもらえることになった。



また出て来た訳の分らない言葉、「名無しの権兵衛」。調べてみた。名無し権兵衛とは、江戸時代、門前仲町の歓楽街で、幕府が公認していない遊女の受け入れを、男の名前を使ってごまかした。まだ名前がついていない遊女を「名無しの権兵衛」と言った。

江戸時代から伝わる童謡に「ずいずいずこころばし、ごまみそずい、ちゃつぽにおわれて……」がある。これは子供たちの遊び歌で、「胡麻味噌を摩って(すって)いると、お茶道中が来たので、戸を閉めてやり過ごす…」と言う意味である。将軍家に献上する宇治茶を運ぶ道中を「お茶道中」と言って、前を横切ると無礼打ちにされてしまう。外で遊んでいた子供たちは、お茶道中が見えたら、急いで家に入り、戸をびしゃりとしめ、やり過ごす。この歌は、子供たちの生活の知恵だったのかも知れない。

最近、友人から聞いた話だが、「あいつとは、腐れ縁でね〜。」は間違いで、「鎖(くさり)縁」が正しいと言われた。鎖のように硬い絆を表しているようだ。しかし、鉄で出来ている鎖も、何時か錆びて腐ってしまう。長年付き合い合っている友人との関係も同じようなもの。「腐れ縁」でも良いような気がするが。



だつ)。

話はかわるのだが、無性に背中が痒くなった時、マガジンラックの雑誌の間に、挟み込んである竹の棒を引っ張りだし、背中をこする。なんとも気持ちが良い。ほっとする。「まごの手」である。いつか孫が成長して、「おじいちゃん、背中をかいてあげようか。」「おう、そうか。」「もう少し、右、右。」なんて言っている自分を想像してしまう。「まごの手」は「孫の手」と思っていた。しかし、違った。語源は中国の西晋時代の書に出てくる仙人(仙女)の「麻姑(まこ)」の手である。孫の手なら、さぞや気持ち良からうに、こんな妖怪に背中をかかれたら、背中じゅうが傷だらけになってしまう。痒いのを忘れ、身の毛がよだつ。また、出て来た訳の分らない言葉。「身の毛が弥立つ(よ

「身の毛が弥立つ」は、皮膚の毛が逆立ってしまうほどぞっとすることを意味している。「弥立つ」であるが、「弥(いや)」は益々と言う意味で、「いやだつ」が「よだつ」となったそうだ。万葉集にも書かれていて、「奮い立つ」と言う意味もある。平安時代につながる言葉を、現代の私たちも使っていることになる。

馬耳東風の「東風」は「春風」の意味で、人は暖かい東風で春を感じるが、馬は分らない。「馬の耳に念仏」と言う言葉もあるが、春風を感じない馬のように、人の意見を聞き入れず、心にもとめない様子を表している。これも中国の詩人李白による1000年以上前の詩の一節である。

「地団駄を踏む」は、聞き分けの無い子供が、「いやいや」をやっている様子を思い浮かべるが、地団駄とは一体何か。地団駄は「地踏鞴(じたたら)」が変化した言葉で、たたらは、金属の精錬や加工のため空気を送り込む吹子のことをさしている。子供が地面を踏んで「いやいや」をやっている様子が、吹子を踏んでいる様子に似ていることから、この言葉が使われるようになった。

そして最後になるが、「うだつが上らない」のうだつである。京都や金沢の町家の風景は、日本の美しさの一つである。「火事と喧嘩は、江戸の華」と言われるが、木造建築は良く燃える。軒をつらねる商家の火災は、二階の窓を伝わって延焼する。これを防ぐための防火壁が「うだつ」である。平安時代は「うだち」と言ったそうで、梁(うつはり)の上になたてる柱を意味していた。江戸時代の中期になると、うだつは防火壁と言うよりも装飾的な目的になり、豪華になった。立派なうだつが立つ商家は、儲かっている証拠であった。「うだつが上らない」、つまり、儲かっていないということである。



私たちが知らず知らず使っている言葉のなかに、様々な意味が隠れている。紀元前200年前の中国の故事であったり、江戸時代の戯れ言葉であったり、生活の情景であったり、様々である。

50年前に20万項目の言葉を収録して、初版が刊行された広辞苑、今年、10年ぶりに改訂され、来年の1月に発売される。そのなかには、新たに1万項目の新語が含まれているそうだ。朝ドラ、白物家電、婚活、ちゃらい、立ち位置、アプリ、スマホなどの言葉が含まれている。果たして、遠い将来、これらの言葉のうち、いくつが残っているだろうか。中国の故事のように、2000年以上残る言葉はいくつあるのだろうか。広辞苑で言えば、新語の候補10万語のうち、収録された新語は1万語であった。9万語は消えた。たかが「まごの手」、されど「孫の手」である。生活に密着したこの言葉、人の背中が痒くならない限り「まごの手」は、永遠に残る日本の言葉の一つになりそうだ。

参考：1. 文春文庫 綱淵謙錠(つなぶちけんじょう) 著「斬(ざん)」

2. ウィキペディア「ダニ」「うだつ」他